



八幡っ子教室 開講

～真剣に勉強しています～

6月3日（水）、八幡公民館で「八幡っ子教室」の開講式が行われました。

この教室は、小学校4年生から6年生を対象に、毎月3回、水曜日に開催しています。11名の子どもたちがしっかりと学習の基礎を築き、学ぶ習慣を身につけています。

特集 平和への思い

《主な掲載記事》

各館の活動報告	2～3
特集 平和への思い	4～6
〈お知らせ〉	7
短詩型文学祭の作品募集	
成人式のお知らせ	
文化祭のお知らせ	
もっと知りたいふるさと	8
(戸倉地区)	

各館の活動報告

屋代公民館

「ゆうゆう学級」
今年はどうな出会いが：

屋代 岩崎 礼子

5月18日（月）今年も「ゆうゆう学級」が開講し、参加しました。

講座の1つ目は聴覚障がい者協会の井出久美子さんによる「日常生活の中で使える手話」。私もお手伝いさせていだいたのですが、「こうやるんかい？」「忘れちゃうよ」等々言いながらも、すぐ習得し、皆さん楽しそうに手を動かす姿がありました。「あいさつ」はコミュニケーションの第一歩！手話も、もっと身近に感じられるようになればいいなと思っています。

2つ目の講座は、森將軍塚古墳館館長酒井賢一先生による「屋代の歴史」でした。海だっ



実際に手話を学びました



熱心に「屋代の歴史」を聴く参加者

埴生公民館

「季節の和菓子づくり」
スタート

主事 斉木 規晃

埴生公民館の成人講座として今年度新たに「季節の和菓子づくり」の講座がスタートしました。

募集の段階では定員に達するかどうか不安でしたが、募集初日早々に定員を超える申し込みがあり、結果的に大人気の講座となりました。

講師には地元で和菓子屋を営む市川製菓の市川今朝水さん、窪田和子さんをお迎えし、季節ごとに趣向を凝らした和菓子

菓子を教えていただきながら、講座でつくった和菓子に家に持ち帰って家族と楽しんでいたことを一番の目的としています。

初回の5月21日の開講式では、「饅頭」と「薯蕷饅頭」づくりに挑戦しました。

ボウルで生地を混ぜ、木べらでこねてから、あんを包んでいくのですが、なかなか上手く包めず悪戦苦闘する受講生もちらほら。蒸し器に綺麗に並べて待つこと十数分、蒸気とともにほの甘い香りが調理室いっぱいになり、幸せな気分になりました。それぞれが完成した饅頭を箱などに入れ、持ち帰りました。

2回目の6月11日の講座では、初夏にぴったりの紫陽花に模した和菓子づくりに挑戦しました。「紫陽花」は白あんの周りにクラッシュした寒天をまわせた、キラキラとみずみずしい伝統的な上生菓子です。

寒天を細かく賽の目に切る作業も、寒天を白あんにまわさせる作業も、本当に難しく四苦八苦する様子もありましたが、受講生同士励まし合いながら紫陽花のように綺麗で可憐な和菓子が出来上がりま



説明を聞きながら饅頭づくりに挑戦



完成した「紫陽花」

した。完成した和菓子を持ちわびている家族を想像しながら、皆さん笑顔で持ち帰る姿がとても微笑ましく感じられました。

稲荷山公民館

やったぞ、2連覇!!
上八日町 飯島 弥生

6月7日（日）、稲荷山公民館分館対抗ソフトバレー大会が開催された。今年はルール改正があり戸惑いながらのスタートになった。我が上八日町のモットーは「全員バレーで楽しもう」なので、どの試合にも勝ち負けを重視せず、全員参加の仲良しバレースタイルで挑んだ。

予選グループは、本八日町区、東区、中町区、荒町区。途中危ない場面もあったが決勝トーナメントに進出。準決勝は元町区、決勝は再び荒町区との対戦だったが、結果、見事2連覇を成し遂げた。全試合、気の合う仲間と一緒に声をかけあいながら楽しくプレーできたこと、応援にかけつけてくれた方々、準備してくださった地域の役員の皆さんに感謝感謝。



白熱したプレーの連続です

中で、年に1度のこの大会でしか会えない面々もいる。久しぶりに顔を合わせ安否を確認し、「元気だった？」とお互いに手を振る光景にはっこり。

来年も仲間と共に大会を楽しむに、健康管理に努めようと、心に誓ったのだった。

優勝 上八日町分館
準優勝 荒町分館
3位 小坂分館
元町分館



2連覇した上八日町分館の皆さん

八幡公民館

給食センターの見学
参加者代表

6月11日（木）、八幡公民館いきいき学級の市内研修で、千曲市第一学校給食センターを見学しました。参加者は見



窓越しに調理の様子を見学しています

学通路の窓越しに調理室の様子を見ながら、栄養士さんからお話を伺いました。

調理室には大きな調理設備が整っており、その規模に驚かされました。市内小学校5校と中学校3校、合わせて約3000食の給食が、わずか3時間という短時間で効率よく作られていることに感心しました。

衛生管理も非常に徹底されており、野菜は3回洗われ、調理中は鍋ごとに3か所で温度を測定して90℃以上を保つよう管理されています。手袋の着用や作業ごとにエプロンを交換し、エプロンや帽子の色で仕事内容を区別するなど、細かな配慮も行われていました。さらに、食中毒などの万一の事態に備えて調理済みの給食を50℃ずつ保存し、2週間保管しているとのことでした。こうした細部までの注意が、食の安全・安心を支えていることがよく分かりました。

栄養士さんは、100種類以上あるメニューの中から栄養バ



試食したおいしい給食

ランスや安全に配慮して給食を考案しているそうです。また、給食センターの職員の皆さんは暑い中で力のいる作業も多く大変な職場ですが、今後も児童・生徒のために安心安全な給食の提供をお願いしたいと思っています。

見学後には、出来立ての給食を試食させていただきました。栄養バランスはもちろん、減塩でだしの効いた味付けがとてもおいしく、元気が湧いてきました。給食センターの皆さん、ありがとうございます。

戸倉公民館

「味噌作り教室」に参加して

吉田 由佳

子どもが小学校で作った味噌がとてもおいしかったので「手作り味噌を作りたいね」と話していた時に、チラシをみつけ応募しました。

「1回作ったことがあるからまかせて」と言っていた子どもたちも、大量の大豆にびっ



「えいっ！」力いっぱい樽に投げ込みます

くり!!しながらも、兄弟で力を合わせて頑張っていました。特に、味噌玉を樽に投げ込む作業が楽しかったようで、盛り上がっていました。

帰ってからは、何度も樽を覗き込み「匂いが変わってきた!!」と喜んでいました。

私は、祖母の味噌汁が大好きで、遊びに行くたびに「味噌汁作って」と、いつもお願いをしていました。少し濃い目の汁に野菜の甘みもあり、妹と競争しながら食べた思い出の味です。

祖母も年を取り、味噌作りはやめてしまいましたが、今回作った味噌が出来上がった味をみてもらいたいと、子どもたちと話しています。半年後が楽しみです。



たくさん味噌玉作ったよ

上山田公民館

さわやかな バレーボールマッチ 力石分館 合津 せな

今年度も無事大会が終わり、興奮冷めやらぬうちにこの原稿を書く機会をいただきました。書くにあたって、力石のチームメイトと慰労会で楽しく、今回の大会について振り返りました。「勝利できてよかった」「楽しかった」「やりきった」など、メンバーみんなから前向きなコメントを聞き、今回も大会にみんなが参加できたことをうれしく思い、そして大会を運営してくださった皆さまに感謝の気持ちでいっぱいです。また、ともにプレーをした別の分館のチームの皆さんも、お互いのプレーをたたえあい、あたたかい雰囲気の中、試合ができたおかげで、「戦っている中でも、相手チームのプレーの気持ちよさがあって、苦しい場面でも楽しんでできた」という話もできました。勝負にこだわらなくても、「親善」という言葉がいつも真ん中にあり、本当にさわやかな大会でした。試合後に、また一緒にやろう!とお互いに声を掛け合う姿に、チームを越えた上山田全体の仲間意識を感じることができました。

私たちの力石チームは年齢層が幅広く、またバレーボー



3連覇した
力石Aチームの皆さん

ルの経験年数もそれぞれです。日々の練習では、そんな経験豊富なみんなが的確なアドバイスをくれたり、励ましてくれたりします。今回私が参加した力石Aチームにもそんな人たちがいて、試合中も冷静な判断、決めるときの勝負にかけるパワー、打たせたいところにドンピシャのトスをあげる正確さ、お互いを鼓舞する声掛けなど、一緒にプレーをしていて、学ぶことがとても多かったです。追いつけない背中だけど、そんな環境で一緒にバレーをできることが本当に幸せです。

これからも、私たちは毎週バレーボールの練習が続いていきますが、技術向上はもちろん、仲間との貴重な時間を大切にしながら来年の大会に向けて、楽しく頑張っていこうと思います。みんな、これからもよろしくね。

優勝 力石Aチーム
準優勝 漆原分館
3位 三本木分館

特集

平和への思い



世界では今もなお戦争や紛争が続く、ニュースから流れる報道に胸を痛める日々です。今回の特集では、戦争体験を記した手記や、ウクライナへの人道支援に携わるポーランドの日本語学校の先生から、さらに戦争を知らない世代からと、多様な視点での貴重な声を寄せていただきました。「平和への思い」を共有し、戦争の悲惨さを次の世代へ伝えていく一助となれば幸いです。

『遠い想い出 あるはぐれ兵士の手記』

故 片山 栄司

(故)片山栄司 著・片山美子 編 『遠い想い出 あるはぐれ兵士の手記』(初版第1刷発行)2006年9月25日 発行所…新風舎

これは実話です。

昭和19年4月、私は河南作戦に参加した。当時、軍はこれを河南作戦と言った。

元来、私は丙種不合格者、招集を受けて新兵の二等兵、行くと直ぐ痔を患い手術を受け、第一、第二、第三検閲を受けず、そのまま作戦に加わり、なにも軍隊の事を知らず、北支、新京より夜行軍に次ぐ、夜行軍を続けた。満州第2909部隊ホ隊第三班と

言い、27師団軽重隊で、種々な想い出を回想しながら行軍中より記す。

行き先はどこまで行くのか私は知らない。約二か月位、無我夢中で歩いた。途中、雨に、風に、砂嵐に会い一か月位歩き通しで体は非常に弱って来たようである。鳥目になった。夜行軍なので足元が良く見えず、馬の「尻尾」に掴まって行軍を続けた。

大休止のある日、私より後から入隊してきた現役の初年兵が自殺した。東京芝公園の近所に住んでいたそうで姓は石黒と言っていた事を思いだした。親は画家だそう、自分の腹を銃で撃つた。弾が貫通して後ろの馬の前脚を撃ち抜いた。馬はヒヒヒーンと鳴いて、もう片脚はぶらぶらしていた。分隊長はこれを見て怒り、

「この野郎は荒縄だ。陛下の活兵器だ助ける、馬の方が大事だ！」と言ひ、馬の手当が先で、人間なんか見向きもしない、石黒は間もなく死んだ。馬は手当をしたが使用出来ず、安楽死させた。その時は全員捧げ銃の最敬礼をした。

荒縄とは、銃殺刑の罪人の事である。

後で知ったのだが、石黒はその時は、既に下痢をして悪臭を放ち、皆から爪弾きにされていたそうである。下痢をすれば、もう死である、飯も食はず水も無く、次第に意識が無くなってくるそう。

自分の不注意もある。隊全体から見れば目に入らぬ小さな出来事で、日本軍隊の内部の星一つの差でこんな悲惨な所を私は見て来た。

これは皆、初年兵時代に味合う試験であろうが、古兵達、少しでも楽をするため、私的命令を出し新兵をこき使うのである。

を食って、何年たっても進級も除隊も出来ない兵隊ゴロ、各隊にたらい回しにされ、「ヒネクレ」万年一等兵、この野郎共が2、3人組んで、私的命令を出して、新兵を苦しめる。

5月に入った頃、黄河を工兵が造った仮橋を、1時間位かかり渡った。向こう岸に行ったら、中国兵が、あっちこっちに死んでいた。我が工兵が、橋を造るのに抵抗した中国兵を山砲でやつつけたそう。臓物を出して死んでいる者も相当見た。又、雨と風に会った酷い地獄行軍、私も相当参って来た。軍全体も同じであろう。

私もこの野郎共に、大分悩まされた。私は同じ初年兵でも年を食っていてコケ嚇し位では驚かないので、奴も一寸

各班に、無教養で、*営倉

の一節に、上官の命は直ちに朕の命と心得云云!と、書かれていた所を悪用するので困る。この一節に、但し書きを付け、ただし、私的命令を出した上官は、厳罰に処す。とかを付ければよかったと思う。



昭和18年11月、入隊当時。



昭和20年3月、良良屯の分院にて。後列、左側が筆者。

(右) 昭和 18 年 11 月、入隊当時の片山さん

(左) 昭和 20 年 3 月、良良屯の分院にて。後列、左側が片山さん

途惑って、半分諦めているようだった。今度来た補充兵は気合入れても駄目だ、参ったな・・・こんな事言っただけでいい。

ザマア見ると私達は皆で笑って「ピンタ」が何だ、殺しはしねえよ、と言っている間も無く星を一ツくれた。

本日付けをもって、一等兵を命じられました！と中隊長以下各長に申告した。今考えれば、これが私の運の付き始めだった。（以下省略）

※兵営内にあつて犯則者を拘留した施設。また、そこに入れられる罰のこと。

昔より私はこの話を聞いていました。父はなかなか文才があるなあと感じていました。いろいろと思ひ出したことをことあるごとに耳にしてみました。

父30才の劇的な思い出なのです。

大陸だ 大陸だ 大陸的な感覚を父は持っていたように思います。

姉（片山美子）が父のためにこの手記を出版してくれたことに感謝です。

上山田温泉

（次女）村田 牧子

ウクライナへの人道支援活動

坂本 龍太郎

ウクライナに対する人道支援活動を始めて1500日を超えました。救命支援、精神的支援、生活支援。ウクライナ人道支援には様々な側面があります。その中には普段あまり注目されない「描く支援」があります。ただ、戦禍に苦しむ子どもたちにキャンバスや絵の具を届けること。そもそもこれは本当に「支援」なのでしょうか。防寒具や食料の方が優先されるべきではないのか。そう感じる方も多いでしょう。なぜなら、私自身がそう思っていたからです。4年前、命を左右する支援こそが最優先だと信じて疑わず、発電機や、医薬品など緊急事態に対処する支援に全力をあげてきました。

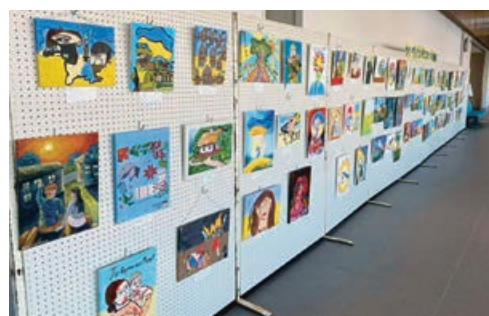


キャンパスにむかうウクライナのこどもたち

のように続けていました。支援への感謝として、子どもたちからは私のもとにくさんの絵が届きます。ウクライナ国内で減っていく画材を考え、せめて受け取った以上のキャンバスは届けよう。正直に言えば、その程度の気持ちだったのです。当時は理解していませんでした。戦争の真つただ中で、絵を描くことがどれほど尊い意味を持つのかを。

空襲警報が鳴り響き、授業は中断される。地下の防空壕で、何時間も身を潜めなければならぬ。そんなときでも、紙と鉛筆があれば続けられるものがある。それが「絵」でした。満足に学校へ通えない日々の中で、絵を描く時間だけが、子どもたちをほんのひととき戦争から解き放つ。それは娯楽ではなく、心を守る方法となっていたのです。言葉にできない恐怖や悲しみを色に託す。叫べない想いを、線に込める。絵は心の奥底に溜まった闇を外へ解き放つ唯一の出口ともなっていたのです。

市内まで20歳のところまでロシア軍が迫っているスームイ市の美術学校には、今も300人を超える生徒が在籍しています。戦争により地下で、時には電気もない中、スマートフォンライトを頼りに絵を描く日々。そこでさらに深刻だったのが、画材不足でした。そんな学校に対し、2025年の夏に300枚のキャンバスと絵の具、筆を届けました。校長先生は言います。「子どもたちは戦争で小さな羽を折られた。



千曲市役所ギャラリーでの絵画展の様子

しかし画材が届き、描き続けていいという翼がまた与えられた」と。

大人が始め、大人が終わらせる戦争。その中で子どもたちは、ただ平和を待つしかない存在のように見えます。絵を描くことは、子どもたちにとって平和を指す小さな戦いです。銃ではなく筆を握るという選択。破壊ではなく創造を選ぶという意志。

いつの日か、子どもたちが戦車ではなく、ヒマワリ畑や青い空を当たり前のように描ける日が来るまでこの支援を続けたいと思っています。子どもたちの夢、ウクライナの平和も、きっと一枚のキャンバスから始まると信じて。

祖父母との思い出から

戸倉公民館主事
轟 恵理子

毎年8月になると、テレビや新聞で戦争の話題が多く取り上げられる。そのような報道を目にした時、私は決まって大好きだった祖父母を思い出す。

両親が共働きだったため、同居していた祖父母が私の面倒を見てくれていた。祖父は社交的で友達も多く、私を旧式バイクの後ろに乗せ、いろいろな場所に一緒に連れて行ってくれた。落ちないように必死に祖父にしがみついた記憶が残っている。母から聞いた話では、オムツを持って出かけ、祖父は外出先で私のオムツ交換までしてくれたそうだ。保育園の送迎も祖父。「自分がされて嫌なことは、相手にもするな」と、人として大事なことを教えてくれたのも祖父だった。私は祖父が本当に大好きだった。

祖父はお酒が大好きで、毎晩のように晩酌をし、酔うと決まって戦時中の話をしてくれた。祖父は第二次世界大戦を経験しており、海軍だっ

たそうだ。手旗信号もたくさん教えてくれた。大好きな祖父だったが、海軍に志願したことを自慢げに話す姿だけは理解できなかった。「死んでしまうかもしれないのに、なぜ志願したのか」と冷静に考えれば祖父の時代は「お国のために！」という教育を受けた時代。そのような思考になってしまう

のも無理はないと思う。それと同時に、教育が及ぼす影響に怖さを覚えた。食糧難の時代でもあったから、祖父は家族では食べきれないほどの野菜を育てていた。ただ、カボチャとサツマイモだけは「戦時中、さんざん食べたから好きじゃない」とほとんど食べなかった記憶がある。



昭和17年頃、旧浦里村から戦地にいる祖父を安心させるため、送った家族写真（旧浦里村は現上田市）

祖母はというと、物がないう時代を過ごしたせいか、一緒に買い物に出かけると、いつも山のように食料品を買っていたことが印象に残っている。

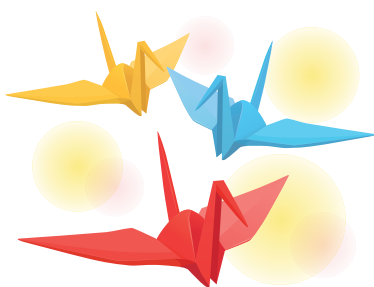
「買い物には、いつでも連れていくよ。一度にそんなにたくさん買わなくても」と言うが、祖母は耳を貸さなかった。私は健康のために玄米や雑穀米を食べているが、結婚当初、夫にも玄米を出して嫌がれたというエピソードを祖母に話したところ「旦那さんにそんなもの出しているのか」とひどく叱られたことがある。白米はごちそうという時代を祖母は生きぬいてきたのだから、そう思うのも無理はないと思った。その後も何回か「旦那さんに玄米を出してないだろうね？」と確認されたものだ。

祖父母と関わる中で「戦争が与えた影響は大きく、生活に染み付いているのだ」と実感する場面は多かった。世界を見渡せば、あちらこちらで紛争が起きている。家や学校を爆撃され、電気もつかない校舎に身を寄せ、生活している人々を特集したテレビ番組を見たことが

ある。毛布に包まれ、外に運びだされる遺体を前に、家族が泣き叫んでいた。モザイクがかかっていたものの、遺体は多数あった。見ていて胸が苦しくなった。それと同時に、自分は平和に暮らしていて、なんだか申し訳なく感じた。

なぜ紛争を起こすのだろうか。武器を持つ国が出れば他の国も持ち始めるのは容易に想像できる。「みんなが武器を持たなくなればいいのに」と私は安易に考えてしまうが、そんな簡単なことではないことくらい、私でもわかる。

祖父母はもう亡くなってしまったが、つらい時、元気をもらいたい時は帰省し、仏壇に手を合わせている。自分の心の平穏とともに、世の中が平和になることを願いながら。



短詩型文学祭作品募集

千曲市と坂城町で構成する更埴公民館運営協議会は、第31回更埴地区短詩型文学祭を開催します。「応募要領」と「投稿用紙」は最寄りの公民館に用意してありますので、多くの皆さまのご投稿をお待ちしております。



- 【募集期間】 7月1日(水)～8月31日(月)
 【募集部門】 短歌・俳句・川柳・現代詩
 【投稿料】 投稿用紙1枚につき500円(小・中・高校生は無料)
 【投稿先】 各地区公民館



令和8年度 千曲市成人式のお知らせ

日 時：令和9年1月10日(日) ●受付：午後12時50分～

会 場：信州の幸^{めぐみ}あんずホール ●式典：午後1時30分～

対 象 者：平成18年4月2日から平成19年4月1日の間に生まれた市内に住所があるか、市内の小・中学校に在籍した人です。※対象者には11月中旬に案内状をお送りします。

問合せ先：上山田公民館(成人式当番館) ☎026-276-5842 または、最寄りの公民館まで。

第55回

上山田地区文化祭

●会場● 上山田文化会館

開催日程

10月31日(土)

展示発表……………9:00～17:00

ふれあいのど自慢……………15:00～17:30

11月1日(日)

展示発表……………9:00～15:00

青 空 市……………10:00～14:00

舞台発表……………10:30～15:00

ふれあいのど自慢参加者募集

ふれあいのど自慢に参加してみませんか。

申 込 先 上山田公民館(上山田文化会館内)

申込方法 公民館に用意してある「申込用紙」に必要事項をご記入の上、期日までに上山田公民館に提出してください。

申込締切 9月13日(日)

※詳細は上山田公民館へお問い合わせください。

問合せ先 上山田公民館 ☎026-276-5842

第24回

更埴地区文化祭

●会場● 信州の幸^{めぐみ} あんずホール
(更埴文化会館)

開催日程 11月7日(土)～8日(日)

参加者募集

作品展示・舞台発表希望の方は下記各公民館へお申し込みください。

申 込 先 屋代・埴生・稲荷山・八幡公民館

申込方法 各公民館に用意してある「申込用紙」に必要事項をご記入の上、締切日までに提出してください。

申込締切 9月3日(木)

申込範囲 更埴地区にお住まいの方、またはお勤めの方で構成するグループ・サークルなど。

※詳細は各公民館へお問い合わせください。

問合せ先

屋代公民館 ☎026-272-0234 稲荷山公民館 ☎026-272-1009

埴生公民館 ☎026-272-0055 八幡公民館 ☎026-272-1076

